様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　５ 月 ２８ 日現在

機関番号：１４５０１
研究種目：若手研究
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ１３０１６

研究課題名（和文）レトリックの構文体系の実証的研究：比喩表現の構造と機能

研究課題名（英文）An empirical study on grammatical constructions in figurative language: Structures and functions of metaphorical expressions

研究代表者
小松原　哲太（Komatsubara, Tetsuta）

神戸大学・国際文化学研究科・講師

研究者番号：７０７７９６３６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：比喩は、理解や感情を引き出すレトリックである。比喩は意味の問題であるとみなされ、偏った構文形式だけが研究されてきた。本研究は、比喩の典型的構文と構文の広がりを明らかにした。副詞的な修飾構造の比喩が典型的であるということが、系統的に隔たりの大きい日本語と英語のあいだに共通していることが分かった。また、少数の用例しかもたない周辺的な構文タイプの用例数の合計は、典型的な構文の用例数よりも多く、「ロングテール」の頻度分布を示すことが分かった。さらに、比喩の構文タイプによって、伝えることのできる比喩的意味には制約があることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
理論的な一般化の妥当性は、研究対象とするデータに依拠している。したがって、比喩研究における理論の妥当性も、研究対象とする比喩のデータに依拠している。本研究は、比喩の典型例が、従来研究の想定と異なるということを明らかにした。この傾向は、日本語、英語の異なるデータセットを用いた調査で、繰り返し観察された。比喩は思考や感情に影響をおよぼすこともある社会的にも重要な言語現象であり、本研究の成果は、比喩研究の根幹をなす現象の範囲画定に再考を迫る重要な意味をもつと言える。

研究成果の概要（英文）：Metaphorical expressions influence our thoughts and emotions. Previous studies have focused on meanings of metaphorical expressions and biased toward a specific constructional form, that is, the copulative construction. This study revealed that it is not the most typical construction. Our empirical investigations made it clear that the adverbial construction is typical in both Japanese and English. Besides, the frequency distribution was long-tailed, and the sum of examples of peripheral constructions was more than the sum of the typical construction. This variation in construction of metaphorical expressions should be considered carefully because by selecting a metaphorical expression, the constructional form limits conveyable meaning.

研究分野：認知言語学

キーワード：比喩　メタファー　構文文法　認知言語学　レトリック　コーパス言語学　対照言語学　社会言語学

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

レトリックは、広い意味では効果的な言語使用である。認知言語学の比喩研究 (Lakoff and Johnson 1980, Lakoff 1993) により、比喩は、特定の作家の文体や、議会や法廷での弁論術を分析する修辞学の枠組みを越えて、言語の体系と概念基盤を支えていることが明らかになった。そこで、比喩の言語学という領域が新たに開拓され、現在も多くの研究成果が継続的に報告されている (Gibbs 2016, 鍋島 2016, Steen 2018, Sallivan 2019, Winter 2019) 。

これまでの研究の主な限界は、比喩の概念基盤が言語表現として表出される際の制約を調べることができないという点にある。従来の研究では、言語レベルの観察から、概念レベルの一般化がなされてきた。しかし、比喩表現の構造や効果は、概念基盤だけでは説明できない。

比喩表現は、概念基盤だけでなく、言語構造にも制約されている。比喩的な意味を効果的に伝達する表現には、どのような語彙と文法が使用されるのかという問いを多面的に探求することで、比喩の言語的表出のメカニズムが明らかになるはずであると考えた。

２．研究の目的

本研究では、どのような語彙と文法の形式が、どのような比喩の意味構造と対になるかを分析する。形式と意味の対は、語彙的であれ、文法的であれ、認知言語学では広く構文 (construction) と定義される (Fillmore 1988, Goldberg 1995) 。本研究の目的は、個別の比喩表現の類似点を調べ、比喩的な意味が効果的に伝達される表現の構文の特性を解明し、類型化することである。

３．研究の方法

本研究では、日本語の比喩表現を対象として、その構造と機能を分析し、比喩の構文類型を構築することを到達目標とする。言語分析によって個々の比喩の実例から類似点を抽出し、帰納的かつ実証的に比喩の構文体系の全貌を明らかにする。

日本語は申請者の母語であるため、最も精密な質的分析が可能である。ただし、分析結果がある言語に固有の特徴であるかを確かめるためには、他の言語との比較が必要になる。このため、現在比喩のデータが蓄積されている英語を並行して調査し、両言語の記述結果を比較して考察する。

以下のような方法で比喩の言語分析を行い、言語学および言語教育などの関連領域において有用な比喩の特徴を明らかにすることを試みた。図１は研究目的、および４つの研究方法の相互関係を図式的に示している。

(1) 研究協力者からの協力と大規模コーパスの利用により、日英語の文学、エッセイ、雑誌記事、ブログ、会話等から効果的な比喩のデータを大量に収集する。
(2) 比喩表現の語彙クラス、品詞、統語構造、文法カテゴリーを記述し、比喩の構造特徴を調べる。
(3) 比喩表現の起点領域、目標領域、共通領域の意味特徴と、談話における機能を記述する。
(4) 構造と機能の特徴から、比喩の構文類型をボトムアップに構築し、その理論的妥当性を検討する。

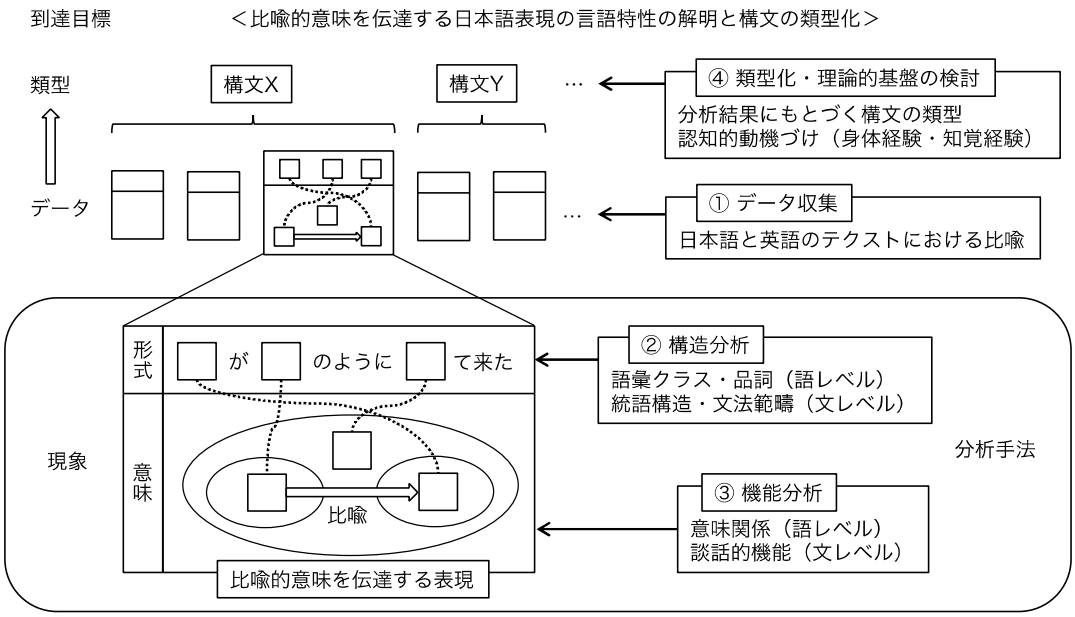

図１ 研究計画の全体

４．研究成果

本研究によって、日本語と英語の比喩表現には構文的パターンが確かに存在し、比喩に共起する文法形式の特性が、比喩の意味に大きく寄与していることが明らかになった。得られた主な成果は、以下の（1）（2）（3）の３点に要約できる。

(1) 類型論的に隔たりの大きい日本語と英語のあいだに、副詞的な修飾構造の直喩がよく用いられるという共通点がある。

これまで分かっていなかった、理解や感情を引き出す比喩に使われる日英語の典型的な構文は、副詞句構文（ないしは連用修飾句構文）であるということを明らかにした。この傾向は、日本語、英語の異なるデータセットを用いた調査で、繰り返し観察された。直喩の典型例は「A は B のようだ」「A is like B」のようなコピュラ構文であると考えられてきたが、本研究の結果は、従来研究の想定をくつがえすものであり、この分野における研究対象の再考を迫る、重要な意味をもつ研究成果であると言える。この成果につながる、実証的調査の結果は以下の通りである。

① 日本語の直喩表現に関して、日本文学から抽出した比喩の用例 1,600 例と対象として、比喩の意味関係の分析と、具体的な文脈における修辞的効果を記述した。日本語の直喩でも、「A ように B」のような連用修飾構文が最も高頻度の構文形であることが分かった。この成果は『国立国語研究所論集』（国立国語研究所）において公表した。
② 英語の直喩表現に関する実証的調査を行った。直喩の用例集からサンプリングを行い、構文構造に関する分析を行った結果、英語の直喩に最もよく用いられるのは like を用いた様態副詞句構文 [NP VP like NP] であることが分かった。この研究成果は、『認知言語学論考 No. 17』（ひつじ書房）にて公刊した。

(2) 構文タイプの分布はいわゆるロングテールを示し、多数の用例がみられる典型的な構文タイプは少数であり、少数の用例しかもたない構文タイプが全体の８割以上を占める。

Glucksberg and Keyser (1990) に代表される心理言語学の比喩研究では、ほぼ上述したコピュラ構文だけを取りあげており、その他の構文は考察されていない。しかし、比喩にはきわめて多様な構文が使用されており、用例の過半数は、典型的な構文タイプにあてはまらないことが分かった。以下の調査結果は、この知見の実証的な裏づけである。

① 日本語の構文の核となるのは助詞・助動詞の分析フレームワークとして、『日本語の助詞・助動詞』（国立国語研究所）を用いた。『日本語レトリックコーパス』に収録された直喩の用例約 900 例について、比喩表現に含まれている助詞と助動詞の用法のコード化を行った。これにより、日本語の比喩には「A のような B」「A は B のように C」「A の B」といった構文が比較的よく用いられるが、構文タイプの分布はロングテールを示した。この成果は、「NINJAL セミナー」で報告し、さらに論文として『国立国語研究所論集』で公刊した。
② 上述した『認知言語学論考 No. 17』で発表した論文では、英語で比喩に使われる構文は、同等構文と類似構文であり、like の副詞句構文を典型例とする、さまざまな構文バリエーションがあることを明らかにした。
③ 大規模英語コーパス COCA から抽出した前置詞 like の用例 400 例の調査にもとづき、従来研究で比喩の典型例とみなされてきた“A is like B”のような前置詞句述語構文は、話し言葉でのみ好まれる傾向があることを明らかにした。この結果は『JELS』（日本英語学会）にて発表した。

なお、①の研究過程で、国立国語研究所との共同研究により、『日本語の助詞・助動詞』を電子化したデータベースを作成し、公開した。

(3) 比喩の構文タイプによって、伝えることのできる比喩的意味に制約があり、比喩の構文選択の背景に認知・機能的な動機づけが存在する。

類型論的に隔たりの大きい日本語と英語のあいだに構文の共通点があるという知見（1）は、比喩の構文選択には認知・機能的な動機づけが存在する可能性を示している。特に、典型的な構文ではなく、周辺的な構文が用いられる際には、使用状況に応じた動機づけが存在する。以下の事例分析の結果はこの種の動機づけの存在を示唆するが、理論的一般化にはさらなる検討が必要である。

① 日本語のコロナ禍の比喩における起点領域の傾向を調査し、社会情勢が変化するにつれて好まれる起点領域が時間的に変化すること、社会的属性によるバリエーションがあることを明らかにした。この成果は、『社会言語科学』（社会言語科学会）、“The Routledge handbook of language and mind engineering”（Routledge）、“Risk Discourse and Responsibility”

(John Benjamins) で発表した。

② British National Corpus からランダム抽出した英語の X as if Y 構文 500 例をとりあげ、従属節 Y の意味的特性を詳しく分析した。その結果、この構文には、喩える概念を虚構的に設定する機能があり、虚構性の生成にはパターンがあることを明らかにした。この成果は、UK Cognitive Linguistic Conference 2020、16th International Cognitive Linguistic Conference、表現学会のシンポジウムで報告し、『表現研究』で論文として公刊した。

①の『社会言語科学』の掲載論文「矛盾する比喩と社会的葛藤―日本語における『コロナ禍』の概念メタファーの不和―」は「第 23 回徳川宗賢賞（優秀賞）」を受賞しており、比喩研究の新たな展開につながる成果であると言える。

＜引用文献＞

Fillmore, Charles J. 1988. The Mechanisms of ‘Construction Grammar’. *Proceedings of the Fourteenth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*: 33-55.

Gibbs, Raymond W. (ed.) 2016. *Mixing Metaphor*. Amsterdam: John Benjamins.

Glucksberg, Sam and Keysar, Boaz. (1990) Understanding Metaphorical Comparisons: Beyond Similarity. *Psychological Review* 97(1): 3-18.

Goldberg, Adele E. 1995. *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago: The University of Chicago Press.

Lakoff, George. 1993. The Contemporary Theory of Metaphor. In Andrew Ortony (ed.) *Metaphor and Thought*, 2nd edition, pp. 202-251. Cambridge: Cambridge University Press.

Lakoff, George, and Mark Johnson. 1980. *Metaphors We Live by*. Chicago: University of Chicago Press.

Steen, Gerard. 2018. *Visual Metaphor: Structure and Process*. Amsterdam: John Benjamins.

Sullivan, Karen. 2019. *Mixed Metaphors: Their Use and Abuse*. London: Bloomsbury.

Winter, Bodo. 2019. *Sensory Linguistics: Language, Perception and Metaphor*. Amsterdam: John Benjamins.

鍋島弘治朗. 2016. 『メタファーと身体性』 東京: ひつじ書房.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計8件（うち査読付論文　6件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　8件）

１．著者名 小松原哲太	４．巻 25(1)
２．論文標題 矛盾する比喩と社会的葛藤―日本語における『コロナ禍』の概念メタファーの不和―	５．発行年 2022年
３．雑誌名 社会言語科学	６．最初と最後の頁 86-101
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.19024/jajls.25.1_86	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 小松原哲太	４．巻 116
２．論文標題 比喩の虚構性の諸相―英語の従属接続詞 as if の修辞的用法―	５．発行年 2022年
３．雑誌名 表現研究	６．最初と最後の頁 20-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 小松原哲太	４．巻 24
２．論文標題 『現代語の助詞・助動詞』の電子化とその応用例―直喩へのアノテーションの事例―	５．発行年 2023年
３．雑誌名 国立国語研究所論集	６．最初と最後の頁 45-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15084/00003687	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 小松原哲太	４．巻 41
２．論文標題 英語の直喩の典型的構文とジャンルによる選好性	５．発行年 2024年
３．雑誌名 JELS（日本英語学会）	６．最初と最後の頁 168-175
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計12件（うち招待講演　7件／うち国際学会　3件）

１．発表者名 小松原哲太
２．発表標題 比喩の虚構性の諸相―英語の従属接続詞 as if の修辞的用法―
３．学会等名 表現学会第57回全国大会（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 小松原哲太
２．発表標題 『現代語の助詞・助動詞』の電子化とその応用例
３．学会等名 第232回NINJALサロン
４．発表年 2022年

１．発表者名 小松原哲太
２．発表標題 文法の修辞的用法としての直喩―換喩的推論をトリガーする X as if Y 構文の機能―
３．学会等名 京都言語学コロキアム（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Komatsubara, Tetsuta
２．発表標題 Inferential simile: Constructions that prompt metonymic inference
３．学会等名 UK Cognitive Linguistic Conference 2020 Virtual（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Komatsubara, Tetsuta
２．発表標題 The fictive source domain: Extending metaphorical worlds via the X as if Y construction
３．学会等名 16th International Cognitive Linguistics Conference（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 小松原哲太
２．発表標題 英語の直喩の典型的構文とジャンルによる選好性
３．学会等名 日本英語学会第41回大会
４．発表年 2023年

〔図書〕　計5件

１．著者名 Adel, Annelie、Ostman, Jan-Ola	４．発行年 2023年
２．出版社 John Benjamins	５．総ページ数 260
３．書名 Risk Discourse and Responsibility	

１．著者名 山梨 正明	４．発行年 2023年
２．出版社 ひつじ書房	５．総ページ数 330
３．書名 認知言語学論考　No.17	

１．著者名 Shei, Chris and Schnell, James	４．発行年 2024年
２．出版社 Routledge	５．総ページ数 472
３．書名 The Routledge handbook of language and mind engineering	

〔産業財産権〕

〔その他〕

『現代語の助詞・助動詞』データベース版
http://doi.org/10.15084/00003531
日本語レトリックコーパス
https://www.kotorica.net/j-fig/

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関